

# 新規就農者の声 ~ 私はこうして課題を克服し、就農できました! ~

作成：公益社団法人 大分県農業農村振興公社

- 質問 ①就農前の職業、就農のきっかけは何ですか？ ④就農のための準備資金はどうしたか？ ⑦今就農を考えている方へアドバイスを!  
②就農に向けて具体的にどんな行動をしたか？ ⑤準備の段階で困ったこと、その解決方法は？  
③家族や周りの方々の意見はどうでしたか？ ⑥就農して思ったこと、感じたことを教えて！

ひ うら ゆう  
**日浦 悠**(32歳) 平成22年5月 杵築市に就農

(出身地：大分県杵築市)、経営規模：いちご25アール、なす5アール

- 接客業をしていたが地元の農協に転職。ミカンの技術員として生産者と接するうちに「農業をやろう、経営主になろう」と思うようになった。
- 「初期投資が少ない作物は何？」と農協の指導員に相談し、なす等の露地野菜からスタートした。
- 昔、苦勞した祖父母が反対したが、今はよき理解者。父母にも手伝ってもらいながら家族労力を中心とした経営を行っている。
- 農地は親から借用し、なすやスナップエンドウを作付けて開始資金を可能な限り押さえた。
- なすを定植した後、県振興局に就農相談したところ、「既に経営開始」と見なされ就農前の準備研修を受講することができなかった。予め就農支援制度を理解した上で行動を起こせば良かったと反省した。自分が求めていることを生産者仲間にアピールしておくことで有益な情報が集まる。今のいちごハウスも部会仲間からの「いちご後継者を募集中」の情報を頼りに借りることができた。
- 農業は自分が社長、頑張った分だけ自分の収益、やり甲斐のある仕事であり「農業は天職」だと思う。今夏から二人を常時雇用し、いずれは管理を任せるつもり。それぞれが主要作業を分担することで大規模いちご経営を確立したい。
- 就農支援制度を十分勉強すること。農地や資金を借りなければ農業経営は始まらない、そのためには、住居を構えた地域の方々、生産部会の仲間から「信頼される人」となることが大切。それが農業人への第一歩である！



こ だま のり ひこ  
**児玉 憲彦**(38歳) 平成26年3月 臼杵市に就農

(出身地：大分県大分市)、経営規模：いちご20アール



- 約10年間自衛隊に入隊。今の就農地を所有していた母方の祖父から「農業をやらないか、農業を継いでくれないか」と勧められ決断した。
- 自衛隊を辞め県立農業大学校に入学して農業の基礎を学んだ。在学中に「いちご栽培」を決断。農大卒業後に更に一年間、臼杵市のいちご農家で栽培技術を学んだ。この間、市役所に高設いちごハウスの建設補助を要請し続けた。
- サラリーマンの両親には「おまえにやる気があるなら真剣にやれ!」と背中を押された。農業大学校への入学も父から勧められたもの。
- いちごハウスの建設に掛かる自己負担金として、近代化資金を借り入れ8年間で返済予定。高設いちご栽培には多額の初期経費を必要とするものの、トラクター等の大型農機が必要ない点が魅力である。
- いちごハウスが補助事業で設置できるか最後までヤキモキさせられた。就農前に3年間技術を学んだが、いちごは生きもの、気象条件にも左右され作柄不安が先行した。今でも技術を教えて貰った師匠を頼って、学びの毎日である。
- 「過信・慣れ」の先に大きな失敗がある。原点に戻り常に謙虚であるべき、困難に直面した時は他人の話を十分に聞いて対処すること。いちご栽培には観察と記録が重要。就農当初から5年併記式作業日誌をつけて、前年と比較しながら日々の作業を進めている。
- 農業は一人ではできない職業。何でも相談できる師匠を複数持つこと。自分が計画イメージどおりのいちごが収穫・出荷できた時、何事にも代え難いワクワク感がある。これが農業の醍醐味である。

み また ちから  
**三股 力**(40歳) 平成27年4月 佐伯市に就農

(出身地：大分県佐伯市)、経営規模：いちご20アール

- 熊本県での測量会社勤務を経てUターン、親戚の紹介で大分県の新規就農制度を知った。いちごは高収益が期待でき、高齢でも作業が可能な軽量の品目で、家族が日々一緒に作業ができることも魅力ある作物と考えた。
- 2年間佐伯市内のいちご農家で基礎技術を学んだ。厳しい指導であったが現在の自分の礎となっている。今でも師匠であり感謝している。
- 父母は佐伯市米水津でミカンを作ってきた。高齢となり重たいミカンはもう限界、軽くて高収益が期待できるいちご栽培を応援してくれた。
- ハウスは補助事業を活用して設置。その自己負担金や当面の運転資金として青年等就農資金を借り入れ、長期間で返済する予定。親からの資金援助も有り難かった。
- いちご栽培に適した条件の良い農地を借りることの難しさ。特にハウスを建てることで敬遠される(返却が困難となる心配からか?)。親戚や農地中間管理機構の駐在員等の仲立ちでやっと確保できた。研修前に農地が確保できたことで、就農準備研修にも集中できた。
- 「大変だった」の一言。いちごを栽培することもひと苦勞、収穫後のパック詰め作業は時間との戦いとなる。いちご栽培は単なる農作物を作るのではなく、見栄えも味覚も要求される「商品づくり」であることを知らされた。
- 中途半端な気持ちでスタートするな。まず、家族の理解と協力を取り付けること(最後に頼れるのは身内しかない)。周囲の生産者仲間、住まいの近隣住民との人間関係を大切にすること。助けを受けることが必ずあると肝に銘じよ。



# 新規就農者の声

作成：公益社団法人大分県農業農村振興公社

～ 私はこうして課題を克服し、就農できました！～

- 質問 ①就農前の職業、就農のきっかけは何ですか？ ④就農のための準備資金はどうしたか？ ⑦今就農を考えている方へアドバイスを！  
②就農に向けて具体的にどんな行動をしたか？ ⑤準備の段階で困ったこと、その解決方法は？  
③家族や周りの方々の意見はどうでしたか？ ⑥就農して思ったこと、感じたことを教えて！

## 堀 行臣 (37歳) 平成26年4月 竹田市に就農

(出身地：福岡県北九州市)、経営規模：夏秋トマト28アール

- 7、8年間の音楽活動や会社勤務等を経て、結婚を機に職業としての農業に関心を持つようになった。福岡市で行われた大分県の就農セミナーに参加、竹田市の就農支援の内容を聞き決断。32歳でトマト学校に入学した。
- 技術はトマト学校で学べるので、妻や子供のための移住環境や支援制度を徹底して調査。当時、大分県の移住支援制度は他県にない手厚いものだった。
- 農業への憧れを持っていた父親からも背中を押された。妻も「家族と一緒に仕事ができ、子育てができる農業」に同意してくれた。
- トマトハウスはリース方式のためまとまった初期投資は不要であり、14年間にわたりリース料として返済する。運転資金は父親からの借り入れと年間150万円の青年就農給付金(経営開始型)で対応した。
- 近くに身内や親戚が無く、万一の時が不安だった。唯一の相談相手はトマト学校の仲間達。トマト学校の校長先生には農地の確保、行政とのハウス予算の折衝から家族の生活相談まで大変お世話になった、感謝、感謝です。
- 行政の厚い支援には感謝している。地元のトマト農家の皆さんは長年の努力の積み重ねで今日を築いてきた。それに比べれば自分達は僅かな苦勞で農業者になれた。「やってもらって当たり前!」ではなく、もっと謙虚な気持ちで地元へ恩返しをしたい。
- 農業で生計を立てていくためには、地元へ馴染み溶け込むことが第一である。農業は数字の積み重ね、自分の経営実態をデータでしっかり把握すると同時に作物への愛情を忘れないこと。就農3年目を迎えた今年、やっと自分の経営が見えてきた思いである。



## 小幡 和也 (29歳) 平成24年4月 玖珠町に就農

(出身地：大分県玖珠町)、経営規模：夏秋ピーマン16アール、里芋10アール、他



- 大学卒業後、地元の農業研修施設で園芸品目の農業体験を経験する。その際、玖珠町No.1のピーマン農家に出会い、味わったことのない食味、高い生産性と収益性、農業に取り組む姿勢等に魅せられ、就農を決意した。
- ピーマン栽培に欠かせないビニールハウスを求めて県内の産地を訪問。手頃な中古ハウスを譲り受けることとなり、地域の仲間の協力を得て移設することができた。
- 両親は「信念を持って自分で進め!」と応援してくれた。4年間継続できたのも親の支えがあったからと感謝している。農業を生涯の職業とする目処もついた。
- 多少の貯蓄と年間150万円の青年就農給付金(経営開始型)が全て。中古ハウスの活用、苗代や肥料・農業代は精算払にしてもらうことで乗りきれた。夏秋ピーマンは長期間、毎日収穫・出荷できることで、お金が回るのが魅力的なところである。

- ハウスの他にトラクター、防除機等が必要であるが満足に揃えることができず、先進農家に手助けしてもらった。農業者として、社会人としての付き合いが分からなかったが、生産部会の仲間と交流するうちに鍛えられた。
- 農業は「体力的にきつい、儲からない」イメージがあったが、自分で作ったものを出荷し、食べて貰うことの満足感は何事にも代え難い。農業ってやり甲斐のある職業であることが実感できるようになった。昨年、ハウス10アールを拡大し、更に里芋やニンニク等の露地野菜を導入するなど、経営の多角化と規模拡大を図り経営安定を目指している。
- 迷っている時間があれば「即実行せよ!」、就農支援制度が充実した「このチャンスを活かせ!」と言いたい。

## 若山 祐二 (36歳) 平成26年5月 宇佐市に就農

(出身地：福岡県吉富町)、経営規模：こねぎ62アール

- 大規模こねぎ法人に9年間従事、当初は自ら農業を始める考えはなかった。3年前JA職員から宇佐市内の遊休ハウスを紹介された後、仕事のあり方、家族の生活等を考えて大分味一ねぎ生産部会員としての自立経営を決断した。
- その後、仕事を続けながら休日にハウスの片付け、土づくり、植付準備に没頭した。経営開始を見据えた準備作業を進めたことで就農直後には嬉しい初出荷を迎えるなど順調に経営開始できた。
- 公務員の妻は猛反対。「年をとってもやっつけていける仕事、家族を養うこと」等について話し合い、どうにか説得した。
- ハウスや農機具等の導入、当面の運転資金として農業近代化資金を借り入れた。新規就農者には低利で長期返済の制度資金が準備されており大変助かった。
- 農地やハウス、資金の借り入れ、経理・帳簿づけ、住居の引っ越し等わからないことばかりで、市役所や県振興局、税務署等で聞きまくった。不明な点は先送りせず、自らが関係機関を頼って解決することが重要です。
- 農業は一人だけでは難しい産業、地域に学び、仲間から教えられて習熟できるもの。自分から率先して地域に溶け込む努力が大切。昨年度、部会最高位の品質が達成できたのも地域の皆さんの教えの賜と感謝している。
- 農業経営の前に、地域の方々に自分を認知してもらうことが先決です。そのためには「先ず挨拶すること」が大切です。加えて、自分がやりたいことをとことん調べ、学ぶこと。生産者仲間から活きた技術や経営ノウハウを学ぶことが就農後に大変役立つものです。就農した以上は「全てが自己責任」という自覚が必要です。

